



人生は思考-行動-感動-感謝

1. 常に課題を求めて挑戦すること。
2. 常に行動し、感動、感激を。
3. 常に相手の身になって共に喜び共に感謝を。

国際ロータリー 第2650地区

2002～2003年度 ガバナー 岡村 吾郎

私がロータリークラブに入会して30年になります。色々な奉仕活動に参加して、感激も感動もいたしましたが、ガバナーに就任以来、各奉仕委員会に直接おもむき、私の目ではっきり見極め、一番驚きましたのは、各奉仕活動に積極的に参加しておられる「ロータリアン」あえてロータリアンと呼ばせていただきます。その方々は、単なるロータリー会員ではないのですから。そのロータリアンの方々の奉仕活動中、また活動について討論されておられる時の眼差し、雰囲気、姿が「子供の様に」輝き、いきいきとしておられることでした。

「なぜだろう」と考えました結果、私なりに結論に至りました。即ち、奉仕の原点には心があり、その「心」から発しましたインスピレーションが頭脳を刺激して、「考え」が浮上し、そして活動・行動に移ります。その活動・行動をいただいた相手は、感激し喜びを表現します。そこで、行動した人も、それに伴って心も体も感動して、共に感動と感激イコール喜びと満足感が生まれるのです。そこに於いて両者に感謝の念が生まれて来ます。そしてお互いの心の中に、人に対するいつくしみ、思いやり、友情の源となる慈愛の心が生まれてくると信じます。そして、再び行動というサイクルが芽生えて、その一つの周期が繰り返されいくと考えます。

行動により感動が、喜びが、感謝が、慈愛の心が人々に伝わって、心を結びつけてゆくでしょう。

奉仕について、皆さんも一度お考えいただきたいと思います。



米山月間に思う

始めに台南の元米山奨学生の娘からの手紙をご披露します。

『私は相変わらず元気です。お父さんは最近また忙しいんでしょう、ロータリーのことで。体の方、気をつけてね。お母さんに迷惑かけない様に。・・・中略 今年の9月に長男の宗延ちゃんが小学校一年生になるということで、私はこれから、もっと忙しくなるかもしれないし、教育ママになりたくないけれど、どうだろう？ちょっと心配です。お父さんもお母さんも心配で家庭を支えてきたのですか。今度上手な支え方教えてね。』



米山奨学生の廖小慧さんの家族とともに

お知りあってからもう13年になりました。時の流れは速いものですねえ。何だかお年寄りみたい。でもでもこれから何十年もお付き合いしたいですから仲良くしようね。お体をくれぐれも大事にしてください。ではではさようなら』こんな嬉しい涙の出るような便り。

1989年米山奨学生として奈良教育大学に入学し奈良RCが受け入れました。可愛く理知的で人なつこい娘で、全員に好かれて居りました。私が台南南RC創立25周年式典に出席し、祝を述べる為の原稿を中国語に翻訳してもらったのが切掛で、両家の家族とのお付き合いが始まったのでした。そして勉学を終え、帰国後銀行員と結婚して、二人の子供に恵まれ、現在日本語学校の先生をしています。そして度々便りをくれます。本当に可愛い娘です。

彼女が米山奨学生でなかったら一生出会うチャンスは無かったでしょう。私と彼女とは米山梅吉氏の「慈愛の心」でもって遠く離れていても、私達は父と娘として心が強く繋がっているのです。米山梅吉氏に心からお礼を申し上げたい。

皆さん勉学してくる学生を自分の娘、息子として面倒を見てあげてください。奨学生には一生の思い出となり、日本人の優しい心を理解し、世界の平和に貢献してくれるでしょう。

米山奨学会の発展を祈ります。



第53回 WHO西太平洋地域委員会開催



世界保健機関(WHO)西太平洋地域委員会(WPRO)が、9月16日(月)～20日(金)までの5日間京都国際会館で日本国政府主催のもと、32カ国の地域から保健大臣を含め約200人が参加して開催されました。、当地域は日本をはじめ中国、韓国、フィリピン、オーストラリア等加盟37カ国から構成され、毎年9月に各国の保健大臣級が出席し、エイズ、結核、タバコ対策等について議論が行われます。特に前年度の目標達成度評価と共に次年度以降の行動計画、戦略を審議し決定する権威ある機関です。我が国では戦後過去3回開催されております。

RI会長 ビチャイ・ラタクル氏は本年度RIテーマ「慈愛の種を播きましょう」のもとに、慈愛無くしてこの苦難に満ちた世界に平和をもたらすことなど望むべくもないと、メッセージをされ、その一環としてポリオの全世界根絶キャンペーンを展開しておられます。当地区でも千宗室RI元理事を始め岡村ガバナーが先頭に立って、キャンペーン活動を開始致しました。RI2650地区の過去から現在に至るまでのポリオ根絶活動事業は、日本国政府に高く評価され、今回の京都会議を共催という運びとなりました。

当該地域のポリオ根絶宣言がなされた2000年の京都会議より引き続き世界規模のポリオ根絶実現に対して、9月16日オープニングセレモニーで岡村ガバナーが活動状況を発表且つ宣言を致しました。

< ガバナーのスピーチ >

西太平洋地域委員会でスピーチをする機会を与えられた事に感謝致しますと共に誇りに思います。

1985年に国際ロータリーは、ポリオを撲滅するために国際開発機関を援助するという世界的な取組である“ポリオプラス”プログラムを開始しました。私たち国際ロータリー第2650地区は、その時から“ポリオプラス”の下に西太平洋地域におけるポリオ撲滅プログラムを活発に援助してきました。これに加え、1995年からはポリオワクチン接種プログラムを支持する西太平洋地域事務局と協力してアジア数ヶ国で“ポリオミッション”を毎年行っています。

特に1995年にはカンボジアでNIDを援助するためポリオワクチンを提供しました。更に、27人のメンバーがブノンペンにおけるNID活動に参加しました。1996年にはモンゴルでのNID活動に27名が参加し、1997年ネパールでの活動にワクチンを提供しただけでなく、NIDの活動の支援に29名のロータリーのメンバーがWHO/SEAROと共同でNIDに参加しました。

1998年、ラオスにおけるSNIDの活動支援をし、52名のメンバーが参加しました。1999年には44名のロータリーメンバーがSNIDに参加し活動のサポートをしました。2000年、中国におけるSNID活動への支援を提供しました。78名がSNIDに参加し、その後の追跡調査にも加わりました。

全体で200名以上のロータリーメンバーがポリオ撲滅プログラム活動に参加し、その地域の200万以上の子供達にポリオワクチンを提供する事が出来ました。

私たちは免疫性を与える活動へのサポートをこれからも積極的に続けて行く予定です。2003年にはカンボジアでの活動を援助し、西北部の地雷に汚染された地域での免疫性を与える範囲の拡大に貢献する予定です。これらの活動の一部としてビタミンAの提供や、寄生虫症のための薬療法のサポートもします。これらのサービスも免疫性を与える活動だからです。

先ほど申し上げましたとおり、私たちはWHOと密に活動し、国を発展させるためには子供の病気と闘うことが重要だという事を理解しています。多くの取組の結果西太平洋地域は、ここ京都で、2000年10月にポリオフリーを宣言しました。私たちの成功に先立ちアメリカ地域でポリオフリー宣言がされ、去年6月にはヨーロッパ地域でされました。他のWHOにおける3つの地域ではポリオフリー宣言に向け目覚ましい進歩を遂げています。多くの皆様の努力により世界的なポリオ撲滅が近い将来達成されると期待しております。

私たちの地域における達成を誇りに思います。しかし、ポリオフリーの状態に達成したとはいえ私たちの仕事が完全に終わったわけではありません。他の地域からの野生ポリオウイルスの輸入の可能性に加え、ワクチンによるポリオウイルスの発生が重大な問題となっています。この点について私たちは免疫性を与える範囲のレベルや調査活動の質を高く保たなければなりません。

私たちは、ポリオが全世界から撲滅されたと宣言できるその日を楽しみにしております。しかし、まだ私たちは最終的なゴールに達していません。目標達成までパートナーたちはゴール達成を保証するためにこの様々な取組を続けなければなりません。

そして、ワクチンによって予防できる病気で命を落としたり苦しんだりしている子供たちがたくさんいることを私たちは覚えておかなければなりません。これらの病気は子供の健康に影響を与えるだけでなく、経済的な紛失をもたらし地域の貧困のサイクルを持続させる事になるのです。

私たちは西太平洋地域におけるこの最も重要なプログラムを継続援助します。このプログラムは私たち地域の子供たちの健康に大きな効果をあたえています。

R12650のメンバーを代表し、この会議に出席する機会を与えてくださった事に対し心から感謝の意を表します。

ありがとうございました。

● 地 区 公 示 ●

国際ロータリー第2650地区 2004～2005年度ガバナー・ノミニー候補者の推薦

2004～2005年度の当地区ガバナー・ノミニー候補者を選考するため、去る8月24日京都ホテルオークラにおいて「地区ガバナー指名委員会」が開催されました。この会議は国際ロータリー細則13.020.1に基づくものです。

慎重審議の結果、2004～2005年度当地区ガバナー・ノミニー候補者として、敦賀ロータリークラブ会員、神谷保男（かみたに やすお）君を推薦することに決定いたしました。

但し、地区内いずれのクラブからも別の候補者を推薦することができますので、推薦しようとするクラブは、クラブにおける候補者推薦に関する例会で採択された決議に従って、公示期間内にガバナー宛に提出することができます。

なお、その期限内にいずれのクラブからも候補者推薦採択決議書の提出がない場合、ガバナーは「地区ガバナー指名委員会」の推薦した候補者が、ガバナー・ノミニーであることを確定します。

公示期間は、国際ロータリー細則13.020.7.に準拠し、地区ガバナー指名委員会によるガバナー・ノミニー選出公表から14日間とし、2002年10月29日(火)を以って、公示期限とします。

国際ロータリー第2650地区ガバナー 岡村吾郎



神谷 保男 かみたに やすお

敦賀ロータリークラブ会員

生年月日 昭和3年4月8日
現住所 〒914-0052 敦賀市清水町2丁目8番地
職業 医療法人「保仁会」泉ヶ丘温泉病院 理事長
社会福祉法人 特別養護老人ホーム「溪山荘」理事長
最終学歴 1950年3月 金沢大学付属医学専門部卒業
1956年12月 医学博士学位取得

[職 歴]

1951年～1960年 金沢大学医学部公衆衛生学教室
1954年～1957年 厚生省名古屋検疫所 伏木・富山支所長
1960年～1967年 国立金沢病院整形外科勤務
1967年～現在 神谷整形外科病院 開設・院長
1986年～現在 社会福祉法人 特別養護老人ホーム「溪山荘」開設・理事長
1991年～現在 医療法人「保仁会」理事長
泉ヶ丘温泉病院 開設
老人保健施設「湯の里ナーシングホーム」開設
(日本整形外科学会専門医)
(日本整形外科学会認定スポーツ医)
(日本整形外科学会認定リウマチ医)
(日本医師会認定健康スポーツ医)
(日本医師会認定産業医)
(日本体育協会公認スポーツドクター)

[団体職歴]

1977年～1991年 敦賀市医師会理事
1984年～1991年 福井県医師会理事
1977年～現在 敦賀市剣道連盟会長
1981年～現在 福井県学校剣道連盟会長・顧問
1989年～現在 敦賀市体育協会副会長
2000年～現在 福井県老人保健施設協議会副会長
2001年～現在 福井県介護医療施設協議会理事

[ロータリー歴]

1975年4月 敦賀ロータリークラブ入会
1979年 理事 会計
1980年 理事 SAA
1983年 理事 社会奉仕委員長
1986年 理事 副会長
1990年 理事 SAA
1993年 理事 SAA
1995年 理事 副会長
1996年 理事 会長
2000年 I.M. 5組 実行委員長
2002年 拡大特別委員長

[その他]

1987年 ボール・ハリス・フェロー
1995年 ベネファクター
1995年 米山功労者
2000年 マルチプルフェロー(1回目)
2001年 マルチプルフェロー(2回目)
2002年 マルチプルフェロー(3回目)
2002年 クリスタル

「私にとってロータリーとは友情・奉仕です」
 -ロータリー財団なくしてロータリーはない-

地区財団増進委員会 委員長 公文 俊一（京都北東RC）



ロータリアンの皆様には日頃からロータリー財団増進にご協力いただき誠にありがとうございます。20世紀の初頭に始まりましたロータリーは、やがて創立100周年の記念すべき節目を迎えようとしています。これまでも数多くのプロジェクトを通じて世界の恵まれない人々に援助の温かい手を差し伸べてきましたが、本年度も一人でも多くの幼い子供の命を救い、紛争や食糧不足によってもたらされる不幸に一筋の明るい灯を投げ続けていきたいと考えております。

世界の理解と平和というロータリーの夢を追い続けるために当地区といたしましては、

年次寄付は、一人当たり年間150ドルかつ11月財団月間の特別寄付（会員一人当たり30ドル）を目標にご協力お願いいたします。

恒久基金は、④ベネファクター一括払い（1,000ドル）⑤ベネファクター協力会2002～2003（1万円コース）を推進しております。

クリスタル賞は、年次寄付と恒久基金の寄付合計が1万ドルですが、今までに集めておられたお金を加えてということで、改めて1万ドルということではありません。

クリスタル賞受賞を地区の重点にあげております。

遺贈友の会は、ロータリアン個人または夫妻で1万ドル以上の遺産の受け取り人としてロータリー財団を指名することで会員になれます。

年次寄付は今日、現在のプログラムのために使われ、恒久基金は、将来のロータリー財団の基盤を確固たるものにするための必要な基金です。

私たちが提供した年次寄付の

40%は国際財団活動資金(WF)

として全世界のロータリアンの共有の財

産である世界規模のプログラム、3-Hプログラム、GSE、ロータリー・ボランティア、ヘルピンググラント等に使われ、ロータリー財団が管理します。残りの60%は、地区財団活動資金(DDF)として、国際親善奨学金、マッチング・グラント、ポリオ・プラス、世界社会奉仕助成金等に使われ、新しいプログラムとして国際問題研究のためのロータリー・センターや地域社会援助プログラム(CAP)があり、多種多様なプログラムが用意されています。そして、いずれも、寄付、分配、選択、使用の3年サイクルで行われます。ロータリー財団はロータリアン自身のものなのです。

地域社会とのかかわり合いを深めるためのCAPは2002年12月31日にCAPとしては終了しますが、以後地区補助金という名称になり、より発展してまいります。また、人道的プログラムであるマッチング・グラントは1965年の開始以来、飛躍的發展を続けており、現在1万5000件を超えるマッチング・グラントが承認され、世界中の社会の質的向上に役立っています。

国際ロータリーおよびロータリー財団の最大の奉仕活動でありますポリオ・プラス・プログラムは、ロータリー100周年目の2005年までに全世界のポリオを撲滅させることが、ロータリーの最優先事項となっています。会員の皆様御協力よろしく申し上げます。

国際ロータリー第2650地区 財団寄付 年次寄付・基金寄付実績推移

(出典 RI日本サービスセンター)

年度	会員数	年次プログラム基金	恒久基金	使途指定寄付
1999～00	6,275	899千\$	440千\$	93千\$
2000～01	6,019	860千\$	258千\$	27千\$
2001～02	5,797	756千\$	294千\$	7千\$

「財団月間によせて」

財団奨学金・財団学友委員会 委員長 中野 種樹（京都西山RC）



財団奨学金・学友委員会の役割は、財団一般寄付の地区に還元されるDDFの一部を使った各種奨学金プログラムに参加し、同時に元奨学生である財団学友会のお世話をするのであります。それら奨学金プログラムの広報、奨学生の募集、選考、オリエンテーション、留学中の相談、交換学生の受け入れ、帰国報告会の開催、学友会の組織化等があげられます。2002 2003年度より創設されました世界平和奨学金は、世界で7個所に設置されたロータリーセンターにおいて、世界平和と国際協力の専門家を養成するための新たなプログラムです。今年度は、当地区にとって初めての世界平和奨学生候補者として、宇治鳳凰ロータリークラブ推薦の恩田牧さんを選考いたしました。今後世界競争選抜に合格されることを切に願っております。

国際親善奨学金プログラムは1947年開始されたロータリー財団プログラムの中でも最も古いプログラムで、当地区においては1952年に宮野成二さん（前福岡大学学長）を奨学生として派遣したのが始まりです。今日まで合計400名以上の奨学生を派遣している歴史があります。今年2002年は当RI 2650地区より財団奨学生を派遣して50周年という節目の年になり、ガバナー月信2002/6/15 vol.12 および2002/8/15 vol.2 でもご報告しましたが、去る2002年6月2日（日）に50周年記念行事として京都北山のコンサートホールにて学友によるチャリティーコンサートを開催いたしました。収益金は国連難民高等弁務官事務所を支援している日本国連HCE協会を通じてアフガニスタンに送られました。その折には、2650地区のロータリアンの多大なご理解ご支援をいただいたことに対して、改めて厚く御礼申し上げます。また、もうひとつの50周年記念事業として、財団学友の50年誌を編纂し地区内93クラブにご送付いたしました。

これからも国際親善大使の役割を果たし帰国した、多くの優秀な学友とロータリークラブとの関係強化をサポートすることが、私どもの委員会に課せられた大きな課題であります。また、財団寄付の行方でもある帰国奨学生は、その成果を示すことによって財団増進にもつながると思います。今年度も財団増進委員会と合同の委員会を開催し、寄付を集める側と使う側の委員会がお互い連携を図っていきます。

ロータリアン始め広く一般のかたがたにもロータリー財団学友の存在をPRし、国際親善奨学金プログラムの意義を深めていく予定です。このような機会に各スポンサークラブが過去に派遣した消息不明の学友との連絡を取り、ロータリーとの関係を深めていくことが出来ればうれしく思います。その中で一人でもロータリアン候補が出てくればこれほどの成果はないと思います。財団学友が財団増強、会員増強に果たす役割はきわめて大きいと思います。



大きく実らせよう慈愛の実

イラスト：市村 章（相模原RC）

第3組 インターシティーミーティング

社会に慈愛の種を播きましょう

I.M. 実行委員長 太田 伊三男（京都田辺RC）



I.M. 会場（京都ホテルオークラ）

R I 第2650地区2001年～2002年度3組のIMが開催され、その時の会長会議に於いて次年度のホストとして当クラブが正式決定された。その後、開催日を2002年8月24日（土）と決定され、3組のゼネラルリーダーに西村直前ガバナーがその任にあたることとなった。このIMのテーマは「社会に慈愛の種を播きましょう」となり、何度かご指導を賜り本番を迎える事となった。

いよいよ国際ロータリー2650地区3組34クラブのインターシティーミーティングがはじまった。いつものセレ

モニー通り進み、岡村ガバナーの挨拶では、公式訪問から帰られ取り上げられた赤ん坊がスクリーンに写しだされると同時に、泣き声が流されいつにない始まりであった。

次にR I 元理事、千宗室様の基調講演では「一滴の水」と題し一滴の水の大切さを話され、ピチャイ会長のテーマであります、「慈愛の種を播きましょう」に重ねあわせロータリアンはその一滴の水になるようにと話された。

この後、休憩をはさみ特別プログラムパネルディスカッションが始まった。「社会に慈愛の種を播きましょう」について西村ゼネラルリーダーから冒頭にこの主旨と流れについてお話になり、コーディネーターの山口進様、パネリストの今安聡様、黒川正夫様、寿栄松憲昭様、吉村好司様でディスカッションが行なわれた。

山口様の名司会のもと、今安様からは慈愛の種を効果的に播くには、酒造りと絡め、黒川様からは播いた慈愛の種を効果的に育てるには、職業奉仕を通して、寿栄松様からは美しい花を咲かせるには、環境問題を取り上げ、吉村様からは人道的な美しい愛と喜びの奉仕を、ポリオミッションと青少年の為のプログラムの体験をもとお話をされ、その前後にインドの小さな村にて寸劇が入りいっそうの盛り上がりを見せた。ディスカッションではEメールによる例会についての発言があり、来賓席の堀場パストガバナーからは人の顔を見て肌の温もりを感じ、楽しみをもって行くところである、私はその意見に反対であると述べられ、会場内拍手と喝采がまきおこった。

講評では坂部慶夫パストガバナーから身に余るお褒めの言葉をいただき、何ともいえない感激で胸がいっぱいになった。

閉会式は粛々と進み点鐘がならされた。懇親会では多くの方々に友情の種を播いていただいた様に思う。

IMのホストを務めるにあたり27名の会員でどのようにすればよいのか、不安であったが、西村ゼネラルリーダーの懇切丁寧なご指導、また亀岡中央RC様にもご協力を賜り、無事大役を終える事ができた。

多くの方々より有意義なIMであったとお褒めの言葉をいただき会員一同感動と喜びで感無量です。

西村ゼネラルリーダーをはじめ関係者の皆様方、またご参加をいただいた方々には、心から感謝と御礼を申し上げます。ありがとうございました。



千宗室氏の基調講演「一滴の水」



寸劇「インドの小さな村にて」

青少年に慈愛の種を播きましょう

I.M.実行委員長 江上 克介(大津唐橋RC)

ガバナーから第1組のテーマを「青少年に慈愛の種を播きましょう」と与えられました。これに対し県下RCの青少年育成の取り組みの計画、またどんな問題意識や今後の考えを持っているかを知る必要を考え、アンケートをお願いし、回答を得ました。同時に、これによりIMに関心を持ってもらうことにしました。

IMの進め方については、我々ホストクラブの中で良く議論し、なるべく無駄を省く形を考え、ガバナー及びゼネラルリーダーの御指導のもと、次の様な構成で行いました。

- (1) 式典。 この中で米山奨学金のクラブ表彰を行う。県下5RCが対象。
- (2) パネル討議。 IMテーマのもと、パネルリーダーに龍谷大学北原溥教授、パネリストにそれぞれがボランティア活動されている県体育協会の高橋武氏、ピワコネイチャーゲームの会社田良雄氏、ニュースタート関西西嶋彰氏、並びに森定地区青少年委員長をお願いし、この中で県下RCから日頃の活動や意見発表がありました。
- (3) 友愛タイム。ロビーでの自由時間で、地区WCS委員会とPEFC委員会の活動広報展示の場を設けました。
- (4) 講演会。日常性から離れた、且つ若者に勇気を与える内容で、世界的極地冒険家大場満郎氏の講演。一般市民の聴講もよびかけました。
- (5) 懇親会。

以上の内容で終始和やかな雰囲気で行われました。パネル討議では、青少年をとりまく諸問題が提起されましたが、彼らにとって重要な事は、閉鎖的な自己主義に陥らず、社会や地域に対する関心を持ち参加すること、知識だけでなく、実際体験の機会を作ることの重要性が述べられ、地域におけるRCの役割が認識されました。会場からも、意見の発表をいただきました。少し時間不足だったかと思われます。

講演会には、一般市民約160名の参加があり、ロータリーへの市民理解という面では大成功だったと思います。約一時間半、極限的な経験や国際体験、そして農業から始まった大場氏の生活体験などが面白く語られ、全員聴き入りました。

懇親会は、特に余興なくコンパニオンは入れずエレクトーンのBGMのみの中で予定の全テーブル席が埋まり、賑やかな交流ができました。限られた予算の事も理解いただいた上で年一回の県下会員の交流ができたと思います。数クラブがクラブ行事と重複し、参加されなかった事が残念です。

大会登録者は666名、懇親会参加者298名。

以上関係者の御協力をいただき暖かい御支援のもと、IMが催行できた事は、設立7年のクラブとして得るところ多く、色々至らぬ点はお赦しいただき、更めて感謝申し上げます。



京都北ロータリークラブ 創立45周年記念事業

幹事 松居 正親

2002年8月17日、当クラブは創立45周年を迎えました。その記念事業として、また今年度の社会奉仕活動のメインテーマとして、近年注目されている臍帯血移植事業への支援をとりあげました。

臍帯血移植は、出産に際し臍帯等に含まれている血液を採取して増殖させ、低温で保存し、子供を中心とした白血病等血液疾患の患者さんに移植する治療法です。いままでの骨髄移植に比べて免疫反応が起こりにくい長所があり、今後ますますその重要性が増してゆくといわれています。

今回の45周年記念事業には、姉妹クラブである台北北ロータリークラブからも協力のお申し出をいただきました。去る8月10日(土)に開催された創立45周年記念式典において、両クラブからの寄附を、この事業を推進している日本赤十字社を通じて、日本臍帯血バンクネットワークへ寄贈致しました。

この臍帯血バンクの活動は、正式発足よりまだまだ年月も浅く、研修開発と同時に広く宣伝広報に役立てていただき、このことによって、一人でも多くの貴重な命が助かることを、会員一同は心より願っております。

また、これをきっかけに、会員一人一人の意識を高めてゆくために、9月には専門家による例会スピーチも予定しています。



ロータリー情報委員会だより

『慈愛の種を播きましょう』

地区ロータリー情報委員 谷内 乾岳(京都西RC)

良き友を持つことが、その人の生涯にとって如何に素晴らしいことであるかに就いて、多くの人が語っているが、孔子と釈尊の二人の聖人の話を振り返ってみる。この二人は不思議なことに、ご自身では書いたものは残されず、弟子の問いや折りにふれて語られた言葉として伝えられている。先ず孔子には「孔子の三楽」と言われる人生の三つの楽しみの中に、賢友多からんことを楽しむというのがある。また論語の第一節の冒頭に、友あり遠方より来る亦楽しからずやとあるのは、今もよく知られる言葉である。

釈尊についても弟子阿難の、友達とは人生にとってどれ程大切なものですかの問いに対し、良き友、良き仲間と共にあることは、聖なる道のすべてであるとの答えがかえっている。孔子の賢友と言ひ、釈尊の良き友とは、言うまでもなく相手を理解し、信頼し合える仲間ということである。そこには友の幸を願う心がこめられている。すなわち喜びや楽しさの因縁を他人に与えることが友情であり、更に相手の苦しみ悲しみを解消してゆく努力がこもっていなければ、真の友情とは言えないのではないか、ただこの友情が特定の人だけに關わるのではなく、自分の周囲の人、人類全体に及ぶという認識と行動が、“慈愛の種を播きましょう”ということであろう。

「本当の幸せとは何だ・・・」

第2650地区 2002年度 海外研修 [タイ]

北東部シーサケット県村での民泊体験とアユタヤ遺跡の旅

THAILAND

第2650地区インタラクティブ委員長 加藤 陽一



昨年に引続きタイの北東部、シーサケット県にて8月20日から25日まで第2650地区のインタラクティブの海外研修を行いました。今回も国際民際センターの協力を得て出来たことをまず感謝申し上げます。

8月20日夜、第2650地区のインタラクティブの代表生徒29名と顧問の先生7名、そして私ロータリアンが1名の計37名が深夜の関西空港に集まりました。深夜にもかかわらず、多くの地区委員の方々やロータリアンの見送りを受け、不安と期待を抱きながらタイへ出発いたしました。朝にはバンコクに到着、乗り換えて北東部ウ

ボンラチャタニに入りました。明日から昨年の感動をもう一度と期待に胸を膨らませながらシーサケットの村に行きました。今回の研修の目的は、タイの貧しい？村の子供たちとの交流を図る為と、異文化を通して今の自分や日本の現状を見つめ何かを感じてもらいたい事でした。



ダルニー奨学生に会いに

昔、日本の青年がタイの現状をみて貧困な子供たちが学校へ行くように奨学金を与える運動を始めました。そして日本円で1万円か、書き損じはがき250枚を集めることによって一人の子供が一年間学習できる資金を作るNPO国際民際センターが設立さ

れました。最初の奨学金を受けた子供がダルニーちゃんだったそうです。そこからダルニー奨学金ができたそうです。昨年同様、今回もその民際さんのスタッフに大変お世話になりました。昨年も同様の研修後、ある高校はその趣旨に賛同して学校でダルニーの募金活動をされました。そして今、三人のドナーになって支援をされています。今回、その奨学生たちに会う機会があり、みんなでいろいろと話をお聞きすることができました。今、数校でダルニーの募金活動をインタラクティブの活動



いつも笑顔のタイの高校生

としてされています。

話を元に戻しますが、村に入ってから、学校での歓迎会や色々な交流がありました。教室でのタイ語と日本語の交流、タイの花作り、タイの伝統的な踊りの講習、タイ料理の体験など本当に私たちのために誠心誠意、学校と村が一団となってしていただきました。村をあげた歓迎にインターアクターは感激されたのではないのでしょうか。また、村での民泊もいい経験となったことでしょう。バレーボールやセパタクロの試合も面白かったと思います。

いろいろな経験と思い出、笑顔の美しいタイの人たちに感謝して村を去るときには、みんなの目には温かい涙が溢れていました。そして、みんなが思ったことは、「本当の幸せはなんだ・・・」ということではなかったでしょうか。「お金はなくても何でこんなに心豊かになれて、にやさしいのか、なんでみんなの笑顔がこんなに美しいのか」と思われ、日本と比べられたと思います。毎回同じ経験をしているのですから、来年からは「インターアクトウルルンの旅」に名称を変更しようかと思うほど感動といい経験をさせてくれる海外研修です。バンコクに帰ってからは、唯一の観光としてアユタヤの遺跡を見に行きました。夜のライトアップもきれいでした。象に乗ったことも、いい思い出になった事と思います。詳しい話は、生徒や顧問の先生の感想も読んでいただきたく思います。

タイ北東部は、タイの中で一番所得が低いそうです。バンコクの年収が60万円、北東部は約6万円弱と非常に低く、さらに今回行った農村の方々の年収は、2万円程度まで低くなります。中学に入ると教育費は年間1万円かかるため、まだまだいくら能力があっても学校へ行けない子供たちが一杯います。書き損じはがきを集めることにより、一人でも多くの子供たちが学校にいけるように願わずにはいられません。

今回の研修のアクターの感想文を読みますと、本当にこの研修が有意義なものであると再確信させられました。今一度、30数年前にアクターで海外研修に行って感動した自分を思い出しながら、帰国後のアクターのいい変化と自発的な行動に期待をして報告とさせていただきます。



アユタヤにて

ハンディキャップとの共生社会を目指して 『新世代のためのリバーウォッチング』

平城京ロータリークラブ 藤原 隆夫



開催日時：平成13年9月6日（木）

午前8時30分から午後2時

開催場所：奈良県桜井市倉橋崇峻天皇陵付近寺川

対象：奈良県立ろう学校 小学部（小学3年生、4年生）

参加人員：ロータリアン15名、奈良県立ろう学校小学部児童17名、その他18名
合計50名

環境保全や自然に対する関心が高まり、自然観測会をはじめとした自然に親しむ活動が各地域において行われていますが、これらの活動において、体の不自由な方々が参加する機会は、非常に限られています。その要因としては、体の不自由な人たちが安心して、自然とふれあう環境が整っていないことが考えられますが、我々にもその原因があるようにも思います。

私たちはどの様にして体の不自由な人たちと共に自然に触れ、自然を感じる事が出来るのか。

私たちのほとんどは、目や耳の不自由な子供たちでさえ、コミュニケーションする手段を持っていません。ハンディを持つ子供たちも社会の一員です。充分とはいかなくても少しでも、目や耳の不自由な子供たちとコミュニケーション出来れば。私たちが少し努力して、簡単なコミュニケーションの方法を身につければ、挨拶ぐらいのコミュニケーションが出来るのではないのでしょうか。

体の不自由な人たちだけのグループではなく、ごく自然にすべての人と共に散歩や自然観察が出来る。こんな共生の時代が、そこまで来ているような気がします。

このようなことから、今回私たちは、奈良県立ろう学校の児童（小学部3・4年生）と一緒に、奈良県桜井市倉橋の寺川でリバーウォッチングを実施しました。

宝永小学校ビオトープ創設について

福井北ロータリークラブ 藤沢 憲治



「わあ〜！」「かわいいね！！」

これが4月13日、池にフナ、メダカを初めて放流した時の子供達が共に発した歓声です。子供達と共に共通の夢を語り合った様な喜びの一瞬でした。

都市化の進んだ地域社会の学校に池などを設け、身近になくなりつつある自然を僅かな小さな物でも再現し、子供達と動・植物とのふれあいを感じ合い、生きる事への喜びを共に感じつつ、地域の環境政策にマッチしながら学校、父兄、子供そしてロータリー会員との共同作業を行った事業がビオトープ作りだと思っています。

子供達が泥んこになりながら大きい石や砂の入ったバケツを両手で抱え、池の中へ敷き詰め、周囲にクヌギ、ナラ、ウメモドキなど父兄らと共に汗を流しながら植樹、そして最後の作業がメダカの放流であり、放流した時の最初の言葉が冒頭に記した感動の一瞬であり、我々も感無量の言葉だと思っています。

大人も子供も汗を流し、環境保全の事業に参加・協力していく姿は何事にも替え難い教材と言えるのではないのでしょうか。



メダカの放流

ビオトープとはこんなところ です

- 1.子供達がいろいろ小さな生物と触れあいを体験するところです
- 2.子供達が水と緑に関心を持ち環境を大切にすることを育てるところです
- 3.子供達が観察したり、教材として活用したり学習に役立てるところです
- 4.地域の人と子供達が安らげるところです

地区 探訪

地区内の伝統的な「行事」や「芸能」「食」
などに関する話題を
地元RCからお伝えします



近江中山の芋くらべ祭

滋賀県蒲生郡日野町の中山地区に、毎年9月1日、中山の東西二つの集落が野神の神前で里芋の長さをくらべあって、豊かな秋の実りを祈る「芋くらべ祭」があります。これと同じ祭りは全国どこにもありません。

史料によりますと、今から830年程前、平清盛の執政時代に中山地区で芋くらべの神事が行われていたとのことですが、それ以前にも何かの形で芋くらべらしきものがあったのではないかと考えられております。

なぜ里芋の長さをくらべるのかについては定説はないようです。稲作以前の日本人は雑穀や芋類を常食としていましたが、中山では地形上からも栽培容易な芋類がまず作られ、当時の村人の大切な食糧となっていました。そこで互いに芋の出来具合をくらべあったのではないかと、また、「いも」（鋳物）鉄器を司る神の代用とかの節があります。

9月1日、中山東と西の各家で栽培された里芋（祭りに使用する芋は「唐とうの芋いも」または「八やツ頭がしら」と呼ぶ芋）のうち、一番大きなものを選び、太い孟宗竹に結わえて芋飾りをします。

熊野神社での盃の儀式を終えた後、野神山に登り、山頂の祭場に入ります。祭場には前日までに山子やまこと呼ばれる男児たちが竹矢来で囲み、小石を敷き詰めて清掃しておきます。

祭場では、東西七人ずつの山若やまわかと呼ぶ袴姿の青年たちが祭儀を進めます。神供の品、三献九度の盃、神すもろの角力の儀礼、供膳、引出物の交換など、史料に記載された当時のままの儀礼が続き、最後に一定の形式に従って芋の長さくらべが行われて勝負が決まります。西が勝てば豊作、東が勝てば不作との言い伝えがあります。

「近江中山の芋くらべ祭」は、平成3年2月に国の重要無形民俗文化財に指定されました。

大昔から中山東西両集落の人々により代々受け継がれてきた「近江中山の芋くらべ祭」は、素朴な農村の野神を祭る儀式であり、丹精こめて作り育てた大きな里芋の長さを競う奇観は、日本民族の遠い昔の生活様式をうかがわせる貴重な文化財と言えます。

参考資料：
芋くらべ祭保存会報告書・日野観光協会パンフレット「近江中山の芋くらべ祭り」



八日市南RC
上野 照雄

1200年以上も伝承された糸崎寺のほとけのまい仏舞

仏舞とは

福井市糸崎町の育王山龍華院糸崎寺に伝承されてきた、国選ほとけのまい無形民俗文化財「仏舞」は、中国盛唐期の大陸文化を国家的な規模で取り入れる、奈良時代の天平文化の舞楽を今に伝える貴重なものである。

大陸から渡来した古典的な音楽舞踏である舞楽は、全国各地に舞楽面が多く残されているところから、古くは中央の大寺院で舞われ、やがて日本の古楽と融合しながら地方に伝播して、さまざまに変容しながら伝承されていったものと考えられる。現在、日本で仏舞と称するもの、または演目に仏舞を有するものは、糸崎寺のほか、京都府舞鶴市の松尾寺、島根県隠岐郡西郷町の国分寺など、7ヶ所の寺に伝承されている。その中でも、純然たる仏舞のみを独立させて舞う糸崎町の仏舞は、最も省略の少ない形で伝承されていて貴重なものである。

仏舞の由来

仏舞の由来について、糸崎寺縁起によれば、糸崎寺が養老3年(719)に、天台宗の高僧泰澄大師によって開かれ、その後、天平勝宝3年(756)に、唐土の

高僧禅海上人が来朝され、舟で糸崎の浦を通った時、遙かに見える糸崎の山容が、古樹鬱蒼としていて、その景観はまさに明州(現在の中国浙江省寧波市)育王山に酷似しているのに歓喜雀躍したと伝えられる。上人がここに草坊を結び、仏法興隆に励んでいると、遙か育王山の護り本尊である千手観音が、緑毛に包まれた大亀に乗って免鳥の浜に現れ、それを上人の指示によって漁民が引き上げてより、糸崎寺の本尊として祀られたものであると伝えられている。

そして、この千手観音菩薩が現れたのを機にして、開眼供養の大法要を営んだところ、天地に忽然として大光明が輝き、諸々の菩薩が紫雲に乗って登場し、喜びの舞を始めると、どこからともなく天女達も舞い降り、仏法興隆を祝福賛美する舞に和したという。こうした奇端を今に伝えるものが、糸崎の仏舞であると伝えられている。

過疎化の中にあっても、ゆるぎない伝承の努力を続けてきた糸崎の人びとは、仏舞の縁起のある由来の他、伝承の故郷である、唐の時代の中国明州育王山への遙かな想いを永い間抱いておられた。



福井RC
水間 久一

